

目次

- シンポジウム「転換期のアジア資本主義—豊かなアジアに向かって」のお知らせ
- カンボジア : ポル・ポト後遺症の調査報告
- カンボジア : 情報検証—5月
- 【中国経済最新統計】

主催
京都大学東アジア経済研究センター

後援
京都大学東アジア経済研究センター協力会

シンポジウム 転換期のアジア資本主義—豊かなアジアに向かって

2013 年 7 月 13 日(土) 13 時 30 分

京都大学時計台記念館 2 階国際交流ホール

今日、多くのアジア諸国は自国の低廉な労働力と先進国の資本と技術に基づく輸出主導型成長の段階を脱しつつある。そして新たな成長段階は国民の所得上昇に基づく内需の成長や技術能力の形成によって特徴づけられる。本シンポジウムでは次の三つの異なる切り口の報告に基づいて、アジアで現在進行中のこの経済構造の大転換について、議論したい。平川均氏はこの転換を NIEs 段階から PoBMEs(Potentially Bigger Market Economies)段階への移行ととらえて、全体的見取図を提示する。徳丸宜穂氏はインドの IT 企業内部の変化に着目して、産業高度化の現状を報告する。巖成男氏は制度的視点から、輸出主導型から内需主導型への転換を成功させるにはどのような制度が必要かについて述べる。

司会 京都大学大学院経済学研究科 教授 宇仁宏幸

13:30-13:40

挨拶：京都大学大学院経済学研究科 研究科長 教授 植田和弘

13:40-14:40

国士舘大学 21 世紀アジア学部 教授 平川 均

「世界経済の構造転換—NIEs 段階から PoBMEs 段階へ」

14:40-15:40

名古屋工業大学工学研究科 准教授 徳丸 宜穂

「インド IT 産業の高度化と知識・人材管理」

15:40-16:40

新潟大学経済学部 准教授 巖 成男

「中国の内需主導型成長への転換は可能か」

16 : 40-16:45
閉会挨拶

17:00-18:30

懇親会 於時計台記念館 2階国際交流ホール

司会 大和ハウス工業株式会社顧問/東アジア経済研究センター協力会理事 河合司二
開会挨拶 京都大学大学院経済学研究科教授/東アジア経済研究センター長 塩地 洋

●参加希望者は宇仁 (uni@econ.kyoto-u.ac.jp) まで御連絡ください。なお懇親会参加費は 2000 円 (協力会会員は無料)。

カンボジア : ポル・ポト後遺症の調査報告

28. MAY. 13

中小企業家同友会アジア情報センター代表
東アジアセンター外部研究員(協力会理事)
小島正憲

1. 「5・20 ポル・ポト犠牲者慰霊祭」
2. 労働者の失神工場追跡調査
3. パイリン地区の現状
4. ポル・ポトの墓
5. ポル・ポト裁判進行状況

1. 「あのポル・ポト地獄を忘れるな！」

《 5・20 ポル・ポト犠牲者慰霊祭 》

5/20、カンボジアでは、各地のキリングフィールドに建てられた慰



霊塔の前で、一斉に「ポル・ポト犠牲者慰霊祭」が行われた。もちろん首都プノンペン郊外のチュンエク・キリングフィールドの慰霊祭が最大の物であるが、あえて私はスヴァイリエン州のスヴァイトウ村の慰霊祭に参加してみた。地方の慰霊祭の方が、政治色が薄れ、その本当の姿を見極めやすいだろうと思ったからである。なお、この慰霊祭の日はカンボジアの祭日ではない

《犠牲者慰霊祭で演じられたポル・ポト大虐殺の再現寸劇の一場面》 ため、多くのカンボジア人が知らないという。

※先日私のキリングフィールドの報告のタノ村の正式名称は、スヴァイトウ村であったので、ここに訂正しておく。

当日は朝7時から式典が執り行われた。スヴァイトウ村の慰霊塔前の広場にはテントが張られ、高僧が7人、修行僧が100人以上、行政関係者、小・中学生、村民など、合計2000人以上が参列していた。私は前日買い求めておいた花輪を慰霊塔前に供え、合掌した。慰霊塔は綺麗に清掃され、たくさんの果物などが供えられていたが、花輪は州長と私のものだけだった。そして私は招待席に座るように促された。

慰霊祭はまず参列者紹介から始まり、5人目ぐらいに私の名前が読み上げられた。もちろん外国人は私だけであり、そのとき式場に



はどよめきの声が上がった。そして簡単な読経の後、スヴァイリエン州の州長の挨拶があった。この挨拶は45分間も延々と続いた。州長はポル・ポト時代の地獄絵図を語り、それを救ったのがカンボジア人民党であることを力説し、その後の経済発展の成果を高らかにうたいあげた。それは明らかに7月28日の総選挙を意識したものであり、カンボジア人民党のプロパガンダだった。次いで、ポル・ポト大虐殺の寸劇が行われた。式場内のあちこちではすすり泣く声が聞こえたが、最後にカンボジア軍が登場し、赤色クメールを打ち破り、勝利の雄叫びを上げるシーンになると、式場内は大きな拍手で包まれた。それを見ながら私は、「実際に赤色クメールを追い払ったのはベトナム軍であり、参列者の中にはそれを体験した人も多いだろうに、これをおかしいとは思わないのだろうか」と思った。

最後に高僧たちの読経が行われた。それは低い声調で、日本人の私の耳にも馴染みやすいものだった。このとき州長も含めて参列者が高僧の前に両手を合わせ、頭を垂れて跪いたので、私も同様にした。読経に聞き入っていたとき、ふと私は、慰霊塔の方から、だれかに呼ばれたような気がしたので、頭をあげ慰霊塔を見上げてみた。すると一番上のガラス窓から数個の頭蓋骨が、何かを語りたそうに私の方を見ていた。私はそれらの頭蓋骨に向かって、「私は再びこのような惨劇を繰り返させない」ことを誓い、両手を合わせ彼らの成仏を祈った。高僧の読経が済むと、修行僧たちが立ち上がり、政府関係者や村民たちの間を托鉢に回り始めた。それでこの式典は流れ解散のような状態になり、終わった。時刻は9時半を少し回っていた。



この式典はすでに10年以上続いているということだったが、今年はことに選挙目当てのプロパガンダ色が強かったようである。このスヴァイトゥ村はバベット市に近く、そこにある経済特区にはすでに外資企業が数十社進出し、稼働している。それらの外資企業が、この重要な慰霊祭にまったく無関心で、参列すらしていないという事実は、彼らがカンボジア人民の中に土着する意志がないことの証明であり、それではカンボジア人民から信頼を勝ち取ることができないし、したがって事業として成功することが難しいのではないかと、私は思う。

この日、スヴァイトゥ村から30分ほど車で走った場所にあるスヴァイチロン村でも慰霊祭が執り行われていた。私は、ちょうどプノンペンに帰る途中だったので、この慰霊祭にも参加してみた。すでに式典は終了し参列者はいなかった。この場所には他のキリングフィールドにあるような遺骨を収めた慰霊塔がなかったので、テントやイスの後片付けをしていた僧侶にそのことを尋ねると、「ここには遺骨を納めた慰霊塔はない。この村の人たちが、ポル・ポト時代の犠牲者の遺体を500体ほど集め簡単に埋葬したが、野犬などが食い荒らすため、地中深く埋め直し、その上に供養塔を建てた。これがその供養塔だ。今日は、ここに300人ほどの村の人が集まって慰霊祭を行った」と、その供養塔を指差しながら、教えてくれた。私はそれを見て、カンボジアにはキリングフィールドと呼ばれる場所以外にも、このような無数の虐殺現場や埋葬場所があることを、改めて確認した。



2. 工場労働者の集団失神は、ポル・ポト後遺症か？

昨年来、カンボジア短信で、幾度となく工場労働者の集団失神事件について報じてきた。私は、17年前にミャンマーで縫製工場を経営していたし、また現在、バングラデシュで縫製工場を稼働させている。ミャンマーもバングラデシュも、カンボジア同様に暑く、労働環境や栄養事情にも大差はない。しかしながら、ミャンマーでもバングラデシュでも、集団失神事件を体験したことはなく、耳にしたこともない。そこで私は、このカンボジア特有の集団失神はポル・ポト大虐殺の PTSD(心的外傷後ストレス障害)と関係があるのではないかと考え、そのような通信を行ってきた。だが内心、自分でも、「この仮説はこじつけ過ぎなのではないか」と思ってもいた。そんなとき、読者の大学教授から、この仮説には無理があると、下記のような指摘を受けた。

カンボジア女性労働者の失神について、極めて似た現象がマルクスの「資本論」の中に書かれています。「30人から40人のミシン工がいっしょに働いている天井の低い仕事場に入ったときに受ける感じは、がまんのできないものである。……その熱気は、アイロンを熱するためのガス炉のせいでもあるが、恐ろしいものである。……このような仕事場では、おもにいわゆる適度な労働時間、すなわち朝の8時から晩の6時までの労働時間が実行されている場合にさえも、毎日3人や4人はきまって卒倒するのである」（「資本論」第1巻 第13章 第8節）。

私の意見は、この現象はそれ以前に「のどかな」農村生活に慣れた人々がこの緊張に耐えかねて起こしてしまうものだと思います。そうしたストレスが常態化した社会では生じません。逆に言うと、カンボジアの過去の大虐殺が原因と主張するには少し無理があるのではないのでしょうか。

そこで私は今回、実際に集団失神事件が発生した工場に立ち入り、その真因を調査してみることにした。まず集団失神事件が起きたプノンペン市内の工場数社に、日本の縫製団体の代表という身分を明らかにして、電話で取材を申し込んだ。しかし予想通り、すべての工場に断られた。もちろんバイヤーを装って、工場に立ち入るという手も考えたが、卑怯な手段を取りたくなかったので、正攻法で行ったのである。仕方がないので、とにかく工場周辺に行き、近くの露天商や昼食時に工場から出てくる労働者から直接聞き取り調査を行うことにした。

まずプノンペン市東南のミンチェイ地区にある Due Cotton 社に行ってみた。この地区には、零細縫製工場が無秩序に立ち並んでおり、一見して労働環境が劣悪であることがわかった。工場の前にある露店で、集団失神事件の有無を聞いたところ、それは本当にあったという。露天商のおばさんが、この工場のすぐ隣に女子寮があるので、そこで直接聞いてみるとよいというので、すぐに女子寮に行き、その1室をノックしてみた。すると一人の若い女性が目をこすりながらドアを開けてくれた。彼女は、夜勤明けで、今寝ついたところだという。彼女に、単刀直入に、集団失神事件について聞いてみたところ、驚いたことに、「先日、昼の3時ごろ、**工場の一角にお化けが出た。それを見た女性が失神**し、それを助けようとした女性も倒れた。これが3日間連続して続き、合計で15人ほどの女性が失神し倒れた」と真顔で話してくれた。続けて、「3日後になって、やっと工場の責任者がやってきて、工場内を整理し、僧侶を連れてきて靈魂を鎮めるお祓いを行った。それでやっとお化けは出なくなった。この工場は2年前に立てられたが、そのとき建設途中で掘り出された多くの遺骨などの供養をまったくしなかった。きっとそのお化けが出たのだらう」と語ってくれた。さらに「自分の月給は手取り120US\$ほどで、工場の待遇に大きな不満はない。また食事毎食取っている。寮費の補助もあるので、夜勤もできる。工場内では特別に健康に悪い化学薬品などを使っていない。そんなに暑くもない」と語ってくれた。



次に、最近、大量失神事件を起こしたプノンペン市南東のカーンミンチェイの SL Garment 社に行ってみた。この付近一帯は、プノンペン市の汚水が集中している場所で、周辺には悪臭がただよっており、おまけにコンテナトラックなどが砂埃を巻き上げ道路をひっきりなしに行き交っており、マスクなしでは歩けないほどだった。その中に大型縫製工場などが林立しており、労働環境がよいとはとても言えない立地であった。ここでもまず露天商に、失神事件の有無を聞いてみたところ、確かに有ったという。ちょうど昼食時になったので、工場から出てくる労働者たちに聞いてみると、「この工場には1000人ぐらいの労働者が働いている。月給は100US\$以上で、工場内には安く食べられる食堂がある。暑さ対策としてウォータークーラーも備え付けてある。先日、整備工の一人が、製品の洗い加工用に使う洗剤を、ウォータークーラー用の配管に間違えて注入してしまった。それが工場内にまき散らされたので、配管の元の方にいた労働者がそれを吸い込んで倒れた。当初は原因がわからず、3日間連続して合計150人ほどが失神した。3日目になって、やっと責任者が現場に来て原因を探り当て、配管を清掃したので、それ以降の失神者はでていない」と話してくれた。私は工場から出てくる労働者たちをよく観察してみたが、意外に太った女性が多く、栄養失調気味で痩せた女性を見つけることの方が困難だった。また茶髪であったり、ピアスなどの装飾品をつけていたり、結構、おしゃれな女性が多く、彼女たちから「貧困に喘ぐ労働者」という雰囲気を感じる取ることはできなかった。



結局この日の取材では、「カンボジアの集団失神がポル・ポト後遺症」であるということ立証することはできなかった。私はそのような事態も予測していたので、事前に、この日の夕方、カンボジアの代表的な労働組合の幹部と会食し、集団失神の真因に関して情報交換をする予定にしていた。ところが、残念ながら、労働組合の幹部が急にカンダル州で大きな事件が起きたということで来ることができなくなり、会食はお流れとなった。私は次回、再度、労働組合幹部と会い、彼らの協力のもとに、失神事件工場(私が掴んでいるだけでも10社以上)を、全部、調査してみることにする。

それでも今回の調査で、次のことがわかったことは収穫であったと考える。

- ①これらの問題を起こした工場は、経済特区などにある工場とは比較にならないほど、立地条件が劣悪であること。
- ②これらの工場で働く労働者の労働条件は、集団失神が起きるほど劣悪ではないこと。
- ③これらの工場には、常駐の責任者がおらず、不測の事態への対処が遅いこと。
※ちなみにわが社では、全工場で工場内に宿舎を作り、私を含めて日本人スタッフがそこに寝泊まりしており、有事の際にはただちに現場に駆けつけることができる態勢にしている。
- ④カンボジアにはポル・ポト大虐殺があったことは事実だし、それは解決済みではなく、労働者の心中に PTSD があるということを前提に、経営者はそのための細かな配慮を欠かさず、慰霊祭などを行い、労働者の心理の安定に神経を配るべきであること。

3. パイリン特別市に緊張感なし

バタンバンからシソボンへ向かう国道5号線を、途中で左折し57号線に入り、1時間半ほど走ると、パイリン特別市に入る。ポル・ポトの最後の拠点となったこのパイリン特別市は、今ではのんびりした田舎町の風情を漂わせており、そこからは往年の緊張感はまったく窺えない。現在の人口は7万人で、ポル・ポトの孫が市長を務めているという(未確認情報)。ただしこの特別市の周辺は、カンボジアでも有数の地雷残存地帯であり、うかつに足を踏み入れることはできないとい



う。特別市の中心部に入る手前に、ワット・ブノン・ヤットという小高い丘がある。この丘は、どこを掘っても、サファイヤやルビーの宝石がゴロゴロ出てくるということで、ポル・ポト軍の重要な資金源になっていたということである。今では、頂上にはミャンマーのパゴダ風の黄金に輝く塔が、そのすぐ下に高さ26mの巨大な観音立像が建てられ、丘全体が寺院とされており盗掘から保護されている。丘の中腹には、トーチカがあり、わずかにポル・ポト時代の名残を留めている。この丘から10分ほどの場所にイエン・サリの旧居がある。さらに30分ほど走るとタイとの国境となる。そこには小さいながらもカジノが数軒あり、タイ人の観光客も少なからず訪れているようだった。

4. 入場料を取る「ポル・ポトの墓、タ・モクの旧居」

オードミンチェイ州のタイ国境付近に、ポル・ポトの墓があるというので、そこに行ってみた。その地域はポル・ポトやタ・モクの生まれ故郷であり、今でもポル・ポト人気強い場所であるという。国道67号線を北上していくと、それまで延々と続いてきた平原が、急に山に遮られる。その山道を登り切ると、突然、巨大なホテル風の建設中の建物が現れた。ここにもカジノができるのだという。そのカジノに見下ろされるようにして、茂みの中に、ポル・ポトの墓があった。その入り口には、簡単なゲートがあり、ガードマンが居て、入場料20US\$を徴収された。1か月間に100人ほどの外人観光客が来るという。フランス人が多いようだ。墓は、土盛りを金網で囲っただけの粗末なもので、墓碑もなかったので、真偽を確かめたところ、そこは火葬した場所で、本当の墓はもっとタイ側の山の上だという。村には、タ・モクの旧居も保存されているというので、そこにも行ってみた。ここでも20US\$を徴収された。この付近は一带には湖や森が多く、村のデートスポットになっており、バイクに乗った若者たちが木陰で楽しそうに語らっていた。オードミンチェイ州はタイに近く、タイからの思想的・文化的影響を強く受けているようである。さらに現在紛争中のプリアビヒア問題が解決すれば、カジノを含めて、怒濤のようにそれが浸透してくるのであろう。



《 ポル・ポトの火葬現場 》



《 タ・モクの旧居 》

5. 遅々として進まないポル・ポト裁判

ポル・ポト派裁判が行われている法廷は、プノンペン市内から国道4号線を、車で30～40分ほど走ったカンポール地区という場所にあり、カンボジア市民の足であるトゥクトゥクで行くには遠くてちょっと無理なところにある。しかも道路沿いに小さな看板が出ているだけで、前面にはカンボジア軍の大きな建物があ、その脇の小道を通り抜けて行かねばならず、カンボジア人民に広く開放されているとは言い難い場所である。それでも開廷時には、地方からバスでカンボジア人民が傍聴に動員されているようである。この法廷も現政権のプロパガンダに利用されている側面があるようである。ちなみにこの法廷の正式名称は、Extraordinary Chambers in the Courts of Cambodia (略称:ECCC)。2006年に開始された裁判は、すでに7年を経過したが、この間に判決が下されたのは、トゥールスレン収容所の所長だったカン・ケック・イウに対する無期懲役だけである。イエン・サリ元副首相兼外相は2013年3月に死亡し、そのイエン・サリの妻(元社会問題相)は「認知症」と診断され2012年にその身柄を釈放された。残る被告は、ヌオン・チア元人民代表議会議長(86)とキュー・サンファン元幹部会議長(81)だけである。この二人も高齢のため、法廷はたびたび中断している。また最近では、法廷の維持費用の枯渇による裁判従事者への給料遅配問題からストライキなども生じて、裁判は遅々として進まない状況となっている。



《 後ろが、ECCC の建物 》

もともとこの法廷の開廷にあたっては、「ポル・ポト派の背後に、中国の思想的・軍事的・経済的支援があったという事実を暴き出さない」という国際間での暗黙の了解があったということであり、国内では「虐殺には赤色クメールの末端から最高幹部までがかかわり、そのうち何人かは今も政府の中枢にあるという「厄介な事情」が存在している。関係者にとって裁判の引き延ばしの結果の被告たちの死は、好都合なのかもしれない。

私は今回のカンボジア調査旅行を前に、ニュールンベルグ裁判や東京裁判などを調べてみた。そこでわかったことは、東京裁判では米国人弁護士たちが、「戦勝者が戦敗者を裁くという裁判」そのものが無効であるという激しい弁論を展開したことであり、このとき初めて民主主義の実態を間近に見た日本人傍聴者の多くが驚いたということであった。そして私は、このポル・ポト派裁判では、「世界の民主主義陣営はいかなる論陣を張っているのか」という点を知りたいと思うようになった。残念ながら、今回は休廷中で傍聴することはできなかったが、次回は開廷時に合わせて来て、ポル・ポト裁判を傍聴してみるつもりである。また当初からこの裁判を傍聴し続けている日本人がいるということなので、その人と会い、多くを聞き出したいと思っている。

以上

カンボジア : 情報検証－5月

31. MAY. 13

中小企業家同友会アジア情報センター代表

東アジアセンター外部研究員(協力会理事)

小島正憲

1. プレア・ヴィヒア寺院をめぐるタイ・カンボジア国境紛争の現状

カンボジア北部、タイとの国境となっているタンレック山脈上に、世界遺産に登録(2008年7月)されているヒンドゥー教のプレア・ヴィヒア寺院がある。タイ側では、カオプラヴィハーンの名で親しまれており、どちらも「神聖な寺院」という意味の言葉であるという。プレア・ヴィヒア寺院は、タンレック山脈の斜面を利用して、9世紀末、ヤショヴァルマン I 世の統治下で建造が始められ、12世紀初、スールヤヴァルマン II 世の時代に終わったと考えられている。ヤショヴァルマン I 世は、聡明かつ剛健な王で、在位中に北は中国の南方地域、東はベトナムのトンキン、南は海、西はミャンマーのサルウィン川に接する地域まで、その勢力下に収めた。このプレア・ヴィヒア寺院の位置は、眼下にカンボジア大平原が一望でき、同時にタイの平野も睥睨できるという点で、統治者にとって、まさにベスト・ポジションである。私は、このプレア・ヴィヒア寺院の頂上に立ち、すぐさま、濃尾平野を一望できる金華山頂の稲葉山城(岐阜城)を思い浮かべた。織田信長はそこで「天下布武」の気概を養ったのである。ヤショヴァルマン I 世も、ここで東南アジアの覇者としての気概を育んだに違いない。私もその場に立ち、カンボジア大平原を眼下に見渡したとき、まさに気宇壮大となり、「天下の覇者となる魔力の虜」となった。



2011年2月4日、このプレア・ヴィヒア寺院地域をめぐる、タイとカンボジア両軍が交戦状態となり、数千人の避難民が発生、双方に民間人を含め数十人の死傷者が出た。国際司法裁判所(ICJ)は、1962年にこの地域をカンボジア領に帰属するという裁定を下したが、タイは周辺の4.6平方キロメートルの土地について、タイ領だと主張し続けていた。同寺院が世界遺産に登録されたことが、タイ側の態度を硬化させたようであり、武力衝突に至った模様である。以降、同地域は紛争地域とされており、現在も日本の外務省は、「渡航の是非を検討するように」との注意喚起情報を出している。今回私は、旅行社に「すべては自己責任として処理します」との誓約書を差し出し、この地域に入った。

もともと麓の参道はタイ領となっており、現在、カンボジア側からの観光客はほとんど使用していないという。カンボジア側は断崖絶壁であり、山頂に行くには大きく迂回し、山の裏側から登るようになっていた。ところがこの道路は急坂続きで軍用ジープでなければ登坂ができず、途中のチェックポイントで乗り換えを命じられた。その売店で、ガイドがタバコを3カートンも買ったので、不思議に思って尋ねると、「見ていればわかる」という返事。たしかにジープが急坂を登り始めると、曲がり角ごとに兵士が立っていて、ガイドに何ごとか話しかけてくる。そのつどガイドは、先ほど買ったタバコのカートンを破り、中から1個ずつ取り出し手渡しして行った。遠くから声をかけてくる兵士もいて、ガイドがタバコを兵士めがけて投げると、兵士は慣れた手つきで上手にキャッチした。私はとっさに、北海道の熊牧場で観光客がリンゴを投げると、熊が上手にキャッチする光景を思い出し、吹き出してしまった。同時にここが紛争地域であるということも、すっかり忘れてしまった。

山頂付近でジープを降り、頂上の寺院を目指して、参道や階段を登っていった。あちこちに兵士がたむろしていたが、そこには紛争中であるという緊張感はまるでなかった。この山全体が固い岩で形成されており、プレア・ヴィヒア寺院はその岩石を切り出して作り出されたという。参道も、その自然の岩山を上手に敷石に利用した設計になっており、一枚岩の上を滑らないように注意しながら、登っていった。崩れかけた山頂の寺院内では、仏教僧が仏像を安置し、読経を行っていた。この寺院には、すでにヒンドゥー教の影響はなく、今では仏教寺院となっているということだった。

壮大な寺院跡と絶景を心に残し、登ってきた道とは違う道を降りていくと、軍用監視所があり、そこで観光客が監視



用の望遠鏡をのぞき込み、兵士たちと談笑していた。そこでもガイドが兵士にタバコを渡すと、私にも監視用望遠鏡を覗かせてくれた。それは高性能のもので、タイ軍兵士の人数や行動まで、手に取るように分かった。観光客の中には、兵士の自動小銃を借りて、肩から掲げて記念写真を撮る者もいた。

なお国際司法裁判所は、今年10月にも、国境問題に判断を下すという。

2. 中国企業のコック湖開発、住民の反対運動で頓挫

2007年から、カンボジアの民間企業と中国企業が合弁で、プノンペン中心部から車で約10分の距離にあるコック湖周辺の不動産開発を進めてきた。カンボジア政府はコック湖開発計画を重視しており、合弁企業が住民を立ち退かせたり、コック湖を埋め立てたりすることを容認してきた。しかし数年前から住民の反対運動が激しくなり、今年に入って、90世帯以上の住民が政府や企業に代替地などの補償を求めて、抗議行動を強め、警察との衝突で40人が逮捕される事件も発生した。

住民の反対運動の強行の結果、現在、コック湖開発計画はいったん中断されているが、今度は別の問題が浮上ってきているという。元来、コック湖はプノンペンの中心近くにあつて、遊水池の役割を果たしてきた。それを、排水設備などを真剣に検討することなく埋め立ててしまったため、プノンペン中心部の雨水や汚水が流れ込む場所がなくなり、街中に溢れかえるようになったというのである。カンボジア政府は、先進各国から都市計画の知恵を借りて、早期に手を打つべきだろう。



《 政府庁舎前に広がる埋め立て地 》

3. イオンモール建設進行状況

イオンは現在、プノンペンの中心部のパサク川沿いの新興レジャーエリアとして開発が進んでいるダイヤモンド・アイランドの近くに、延床面積約10万㎡の「イオンモールプノンペン」を建設中である。2014年春のオープン予定で、約150店舗の専門店を入居させるという。すでに、タイのシネマ・コンプレックス最大手のメジャー・シネプレックスが、映画館計7スクリーンと14レーンのボーリング場の開設を決定している。さらにタイのレストラン・チェーンを展開するS&P シンジケートも、カンボジアでの第1号店を同モール内に出店することを発表している。それでもまだテナントは、1/3ぐらいしか埋まっていないというウワサもあり、順風満帆というわけではないようだ。



《 建設中のイオンモール 》



《 イオン・クレジット第1号店 》

《 イオン・クレジット第1号店 》 割賦販売事業を展開し始めたが、まだ第1号店がオープンしたばかりで、軌道に乗っているとは言い難いようだ。店舗に入って、店員に割賦代金や方法などの具体的な話を聞いてみたが、要領を得た答えは返って来なかった。

イオンはこのモールの近くに、トップ・ヴァリュ製品の販売実験店を設けているが、客足は鈍く、テストケースとしての効果もあまり期待できないようである。店頭と並んでいる商品は、ほとんどが日本製で、プノンペン市内の他の店と比較して、若干、安めである。

さらにイオンは、昨年10月にイオンクレジットサービスを立ち上げ、日系企業初となる



《 トップ・ヴァリュ実験店 》

4. 和僑工業園の現状

3/05、日本のビジネスグループ和僑会は、カンボジア地元企業と協力して、プレイベン州に経済特区を開発する合意書を交わしたと発表。その予定地は、プノンペンからベトナムのホーチミンへ向かう国道1号線上にあるメコン川渡河のフェリーターミナルの付近であるという。現在、そこに日本の無償資金協力による「ネアックルン橋」が建設中である。2010年12月に着工され、竣工は2015年の予定。全長2215mの橋で、完成するとカンボジア最大の橋となるという。この橋が完成すればホーチミンへの物流時間が短縮され、カンボジア経済をさらに大きく発展させることになるが、その反面、今までフェリーターミナル関連で職を得ていた地元民は、一気にそれを失うことになる。和僑会はそれの解決策として、ここに経済特区としての和僑工業園を建設し、地元民に職場を提供しようと考えたという。現在、ネアックル



ン橋の建設は着々と進行中であり、陸地にはすでに橋脚がしっかりと出来上がっている。

私はフェリーターミナル周辺で、和僑工業園予定地の看板を探し回ったが、それらしきものは見当たらなかった。近くの村の村長宅を訪ね、その場所を聞いてみたところ、「そんな話は聞いたことがないが、少し向こうの方に、政府から販売禁止を言い渡されている広い土地がある。そこではないだろうか」と話してくれた。そこですぐに、教えられた場所に行ってみたが、そこにも看板はなかった。ひょっとすると対岸のカンダール州なのかもしれないと考え、川を渡って、国道沿いをくまなく調べてみたが、結局、和僑工業園予定地を特定することはできなかった。

5. ポイペト経済特区(SEZ)調査報告

プノンペンから国道5号線を、西に向かって車で6時間ほどひたすら走ると、タイ国境の街として栄えるポイペト市に着く。国境周辺は、タイの商売人やタイへ出稼ぎに行くカンボジア人などの往来が多く、ごった返していた。ポイペトからバンコクまでは、車で3時間ほどの距離で、経済交流が活発だという話だったが、国境周辺ではコンテナ・トラックなどはほとんど見かけず、国境の税関のビルそのものも、活発な物流を捌ききれそうなものには見えなかった。ただしカジノを併設しているホテルが林立しており、夜になると、ポイペトは見違えるように賑やかとなる。私は、その中の1軒のホテルに泊まったが、ホテル代はパーツ支払いであり、リエルもドルも拒否された。ホテルの宿泊施設は、ベトナム国境沿いのカジノ兼用ホテルと同様に、四つ星というわりには良くなかった。朝食もまずかった。ただしカジノ施設だけは豪壮華麗で、多くのタイ人が徹夜で賭け事を楽しんでいた。

翌日、ポイペト経済特区(SEZ)を訪ねてみた。ホテルのフロントでその場所を聞いたが、はっきりとした答えが返ってこなかったため、SEZの事務所に電話をしたところ、SEZ管理者が途中まで出迎えに出るという。国道5号線を15分ほどプノンペン側に戻った場所に、彼は待っていた。そこから彼の車に誘導されて脇道に入った。その道は未舗装で、なおかつデコボコであり、とてもコンテナ・トラックが頻繁に通行できるような代物ではなかった。私はその悪路に揺られながら、「きっとこれは近道なのだろう」と思っていた。広大な野原を突ききって、悪路を15分ほど走った場所に忽然とSEZが出現した。そしてその正面で車を降りたとき、私はこのSEZは、この悪路がメイン道路であることを確認した。



《 ポイペト SEZ 正面にて 》

事務所で管理者から、「この SEZ は2005年のオープンで、現在入居し稼働している工場は2社である」という話を聞いて、私は思わず耳を疑ったが、すぐにこの工業団地が開店休業状態であるということを理解し、道路を舗装する資金さえも枯渇しているという悲惨な現状であることがわかった。その後、管理者は、「このSEZのオーナーはカンボジア華人であり、マカオに100以上のビルを所有している。このSEZはやがてバンコクとの高速道路で結ばれ、2014年には国境沿いに新税関も建設される予定であり、タイとの国境貿易で極めて有利な場所である。このSEZは広さが380ヘクタールであり、3期に分けて開発し、第1期は100社ほどの入居を予定しており、従業員総数で5~7万人を想定している」と、まくしたてた。それを聞いて私は、「この近辺の労働者はタイへ出稼ぎに行ってしまうていて、そんなにいないのではないかと」反射的に質問をした。すると彼は、「そうです。この地域周辺にはそんなに労働者はいません。したがって寮を作って地方から連れてきます」と平然と語った。その後も彼は、立派な SEZ 完成予想図の前で、このSEZのメリットをとうとうと延べたが、どうしても私には、このSEZが工場で満杯となり、オーナーの目論見通りのスケールになるとは思えなかった。私はポイペトSEZを見回りながら、「現在、このようなSEZがカンボジア全体に、20箇所近く存在している。しかもこれらのSEZは開発競争の様相を呈しており、共倒れの危険性がある」と思った。

このSEZの具体的な数字を以下に記しておく。

- ・土地は70年のリース 35US\$ / 1㎡
- ・レンタル工場はなし
- ・電気代 0.15US\$ / KWH (タイ側から供給)
- ・水代 0.35US\$ / 立方メートル (乾燥地帯のため、溜め池を作り浄化して水を供給)
- ・ワーカーの平均月給 100US\$ (実際にはタイへの出稼ぎ労働者の給与に影響され、2~3割増)
- ・ワーカーの募集費用 一人当たり20US\$
- ・寮費 6~8人部屋 40US\$ / 月 一人当たり5US\$ 強

以上

【中国経済最新統計】

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 ^{ドル})	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	9.1	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
12月	9.8	13.5	19.1	4.6	20.4	131	17.9	25.6	9.2	-13.3	19.7	19.9
2011年	9.2											
1月			19.9	4.9	23.7	65	37.7	51.4	16.6	11.4	17.3	16.9
2月		14.9	11.6	4.9	—	-73	2.3	19.7	-10.9	32.2	15.7	16.2
3月	9.7	14.8	17.4	5.4	31.2	1	35.8	27.4	10.5	32.9	16.6	16.2
4月		13.4	17.1	5.3	37.2	114	29.8	22.0	8.2	15.2	15.4	15.8
5月		13.3	16.9	5.5	33.6	130	19.3	28.4	12.1	13.4	15.1	15.4
6月	9.5	15.1	17.7	6.4	11.8	223	17.9	19.0	6.6	2.8	15.9	15.2
7月		14.0	17.2	6.5	27.7	315	20.3	23.0	2.7	19.8	14.7	15.0
8月		13.5	17.0	6.2	33.4	178	24.4	30.4	6.4	11.1	13.6	14.8
9月	9.1	13.8	17.7	6.1	27.3	145	17.0	21.1	-3.5	7.9	13.1	14.3
10月		13.2	17.2	5.5	34.1	170	15.8	29.1	-0.6	8.7	16.7	14.1
11月		12.4	17.3	4.2	21.4	145	13.8	22.6	-12.9	-9.8	16.2	14.0
12月	8.9	12.8	18.1	4.1	5.7	165	13.3	12.1	-15.4	-12.7	17.3	14.3
2012年												
1月				4.5	25.3	273	-0.5	-15.0	4.6	10.8	16.6	14.8
2月		21.3		3.2	—	-315	18.3	40.3	38.7	-0.9	17.8	15.0
3月	8.1	11.9	15.2	3.6	21.1	53	8.8	5.4	-6.5	-6.1	18.1	15.7
4月		9.3	14.1	3.4	19.2	184	4.9	0.4	-26.1	-0.7	17.5	15.4
5月		9.6	13.8	3.0	21.0	187	15.3	12.7	-6.1	0.0	17.9	15.7
6月	7.6	9.5	13.7	2.2	21.8	317	11.3	6.3	-16.3	-6.9	18.5	16.0
7月		9.2	13.1	1.8	20.6	251	1.0	5.7	-7.8	-8.6	18.9	16.0
8月		8.9	13.2	2.0	19.4	267	2.7	-2.7	-12.7	-1.4	18.4	16.1
9月	7.4	9.2	14.2	1.9	23.1	277	9.8	2.3	-6.4	-6.8	19.8	16.2
10月		9.6	14.5	1.7	22.4	320	11.5	2.2	1.8	-0.2	14.6	15.9
11月		10.1	14.9	2.0	20.0	196	2.8	-0.1	-8.7	-5.4	14.5	15.7
12月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
2013年												
1月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2月				3.2		153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9

- 注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
 2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、()内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
 3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。